

第2回 四国生物多様性会議 高知グループワーキングレポート

b. 「人工林地」 レポート

テーマ：人工林地

参加者：12名

以下、●問題点、・参加者からの意見やコメント

●人工林は誰のものか。国有財産、私有財産に対して市民が口を出す論理はあるか？

国有林、私有林と所有形態にもよるが、一般市民が「この林はこのように管理すべきだ」と意見を出すことができるのだろうか。

- ・森林所有者でない一般の人が森林から何かを採ったりすることはできない。
- ・森林の管理方法は行政に任せればいいのか。
- ・山を共有財産としたら、いいのではないか。山や森林の持つ機能は共有すべき。自分たちの財産を自分たちで管理するという考え方が成り立つ。
- ・シカをはじめとする森林にすんでいる野生動物は、誰のものでもない。狩猟されて、銃弾が当たったら私物となる。
- ・山林所有者の境界がきちんと管理できていない。所有者が県外に住んでいる不在所有者も多い。四国に限らず、全国で問題となっている。
- ・私有林であっても、所有者や森林組合などがきちんと管理できないのであれば、国や自治体が管理すべき。

●放棄された人工林はそのまま放置しておくのか？ 天然林に人工的に戻していくべきなのか。

管理をされなくなった人工林があまりに多い。しかし、天然林に戻すためにはきわめて長い時間が必要となる。

- ・何もしなければ、天然林に戻るという場所は、ごく一部にすぎない。少なくとも間伐などはしないとイケない。
- ・全国的に限界集落が増加するなど、中山間地域の人口減少が著しく、山林を管理する人が減少している。
- ・人工林を放棄したら、それが天然林になるには数十年もしくは数百年かかる。いったん伐採して、リセットする。植えた木をそのまま置いて、天然林にするのは無理。
- ・土壌の流亡などによって、河川もだめになるだろう。
- ・もともと水田や畑だった場所にスギやヒノキを植えているところもある。こうした場所は放置しても、天然林にはならない。
- ・木材を生産するのは環境保全の点からも大切だが、管理できないのであれば、見過ごすわけにいかない。
- ・標高の低い温暖な場所では、林を伐ったあとに雑草木が生えるが、標高の高い場所だと

草すら生えないこともある。

- ・間伐するばあい、間伐率が 30%よりも 50%の方が保水力が高くなる。林床の雑草木が早く成長する。
- ・管理できない人工林をそのまま放置してよいということはない。

●現在の人工林すべての管理は可能なのか？ どこまでなら可能なのか、考える必要がある。管理のできない人工林は自然林化も考慮すべき。

高知県の森林率は 84%。人工林率は約 65%。残りは天然林だが、天然林と言っても大半がシイ・カシの二次林で、標高の高い山岳地以外の場所は、ほとんど人手が入っている。

- ・人工林はきちんと管理して利用していくべき。
- ・かつてはエネルギーの補給基地として森林が存在した。薪や炭などの利用。現在では山がエネルギーの供給源ではなくなっている。
- ・管理だけのためでは、山に入りにくいのではないか。
- ・昔の生活だったら、山の利用率は高かった。
- ・四国の山にスギやヒノキを植えて人工林化したのは、歴史的には比較的新しい。戦後の拡大造林政策による。
- ・拡大造林がうまくいかなかったのに、林野庁はそのまま続けて、転換期が遅れた結果、管理できない人工林が増えた。
- ・森林組合も勉強すべき。企業も森林管理に取り組むようになってきている。
- ・都道府県で森林管理を考えるべき。地域に密着した取り組みが重要。

●間伐材の林内放置について

人工林の間伐するのはよいが、間伐された材が林の中にそのまま切り捨てられている。使えるものは利用すべきではないか。

解決法として、バイオマスエネルギーとして利用する。そのために土場まで運ぶようにする。

- ・利用するにもしないにも、林の中に材が置いてあるのは邪魔。
- ・害虫が発生する温床になる。伐ったらできるだけ使うべき。
- ・放置されているのは、運び出すのにコストがかかるから。運び出しても、高く売れないので、赤字になる。
- ・すでに木を植えてしまっている状況に対応すべき。木を伐ること・木材を利用することで良い循環を作るようにしたい。地元も潤う。
- ・森林を管理する主体となる森林組合のやる気の差があるため、どこでも同じようにするというのが難しい。
- ・自治体によっては、一本いくらかで間伐材を買い上げるというところもある。
- ・間伐に補助金が出るので、売れる木は伐って売るが、売れない木は放置している。

●水辺を混交林・複層林化して、水辺から 50m の範囲内では広葉樹の導入をすすめるべき。
山全体を一様に管理するのではなく、河川の近くをうまく管理できないか。

- ・香川県ではやっている。
- ・森林環境税を利用してやってみるのはどうか。
- ・溪流沿いでは広葉樹の方が良い。
- ・溪畔林は河川環境の保全のために、天然林にした方が良い。

●森林の保全管理を所有者まかせにすべきでない。

●人工林、特に奥地山村では集落崩壊等により、管理放棄地が増加している。荒廃林が増え、生物多様性の劣化が進む。シカの生息地帯では、植林しても成立しない。柵を作っても管理できない。持続可能性が不可欠。

- ・社会的な仕組みを作りにはどうしたらよいか。効率が上がるところを集中してやると、それ以外のところは放置される。
- ・山林の管理は危機的な状況に陥っている。
- ・人里に近いところの人工林はまだ管理できる。奥地の人工林は今後、管理していくのが難しい。

●林業で食べていけるようにすべき。

私たちの暮らしにもっと多く木を利用する仕組みをつくりたい。国産材の利用を高めるべき。

- ・ヒノキはまだましだが、スギは木材価格が安すぎる。
- ・木を伐って運び出しても、お金はほとんど残らない。
- ・今の状況では、木材に高い関税をかけて国内林業を保護するわけにはいかない。
- ・今後、木材価格が飛躍的に上昇することは考えにくい。これまでとは違う観点で森林や木材を見ないといけない。
- ・木材だけでなく、他の収入源を活用する。特用林産物（キノコ、タケノコなど）はすでに林家の重要な収入源になっている。
- ・レクリエーション利用の場として森林を提供して、利用料をもらうといった方法も考えられる。観光利用、サバイバルゲームなど。
- ・木材利用、バイオマスエネルギーとしての利用、レクリエーション利用など、さまざまな利用を複合的に組み合わせていく。
- ・私たちの暮らしの中に木の含有率を増やすようにする。それによって、木の使用量が増加する。

●木材の自給率の向上を。

●日本産の木を使う仕組みを作りたい。

現在の木材自給率は食料自給率と同じく、きわめて低い。

- ・林業側だけでなく、社会的に自給率の向上に取り組むべき。
- ・いま、国産材が使われないのは、外国産の材を選ぶ理由があるから。
- ・今はベイマツ（北米産）の利用が多い。これからはカラマツ材（北方林）が多くなる。
- ・森林を管理している側から、自分たちが突破口となるべく、取り組むべき。企業ともいっそう、連携すべきである。
- ・住友林業では、自社で所有している森林の木を伐らず、よその木を伐って利用しているが、自分たちの管理する木を利用して、自給率を向上につなげるようにしてほしい。
- ・森林組合などのやる気のある人たちがネットワークを作って、広げていくべき。
- ・こうした話し合いの場に森林組合や林業関係の業者にもっと来てほしい。

●昔の切り出し運搬の技術が継承されないのでは？

木材を伐出するのに、昔は大型の機械がなくても、うまく工夫してやっていた。こうした技術を伝えていくべきではないか。林業技術が継承されなくなることが懸念される。

- ・昔の人たちはいろいろな技術を持っていた。今のうちに聞いておかなければ、分からなくなる。
- ・昔ながらの方法で、大量に木材を運び出すことができるかどうかは別だが、技術としては重要。
- ・参考にできる点は参考にすべき。

●若者の雇用と技術者の育成

森林管理の担い手が不足している。若い人を後継者として育成していく必要がある。

- ・雇用ができないと、後継者が育たない。
- ・今でも長期スパンの森林管理が難しくなっている。
- ・これから森林を管理していく若い人に技術を伝えていくべき。

（以下、時間切れで意見交換ができなかった項目を列記。上の項目と重複するものも多い）

- 山林に人が立ち入らないことが問題。他人の土地には入れない。
- 切り出しにコストがかかりすぎる。
- 人工林間伐後に林内に木材を倒したまま置いていと歩きにくい。除去すべき。
- 荒廃した林道を整備してほしい。
- 「林業」を「森業」へ。暮らしの中での木の含有率を上げる。入林料をとる。
- 社会インフラとして、山を共有財産として管理できないだろうか。水をためる機能、二酸化炭素を酸素に変える機能など。育った木は山主のもの、森林の機能は共有のもの。市民と一緒に管理していく。

- スギ・ヒノキ林は山の環境を悪化させるので、人工林では、その土地にもともとあった樹種を植栽すべきではないか。
- 木材の利用拡大。間伐材の放置。
- 人工林を適切に間伐した林は快適なので、ガンガンやってほしい。
- 人工林は奥山と里山の中継点ではない。生命線である。
- 人工林は木材生産の適地できちんと管理すべき。

以上